

29) 当院における腹腔鏡下鼠径部ヘルニア手術  
経験

島山 悟・田中 修二 (県立六日町病院)  
村山 実・広田 正樹 (外科)

当院では平成4年12月より平成8年10月23日までに鼠径ヘルニアに対し腹腔鏡下ヘルニア手術を87例施行した。年齢は15歳から81歳で、男性66例、女性21例であった。最初は経腹的腹膜前修復法(以後 TAPP)を施行していたが、術後、癒着性腸閉塞を1例、内ヘルニアを1例経験してからは腹膜外修復法(以後 EPP)を主に施行した。TAPPは60例、EPPは27例であり、ともに再発例は経験していない。

腹腔鏡下手術が鼠径ヘルニアに対する手術の基本術式になりうるかは今後の問題と思われるが、われわれが経験した腹腔鏡下ヘルニア手術について、また TAPP と EPP の相違について若干の文献的考察を加えて報告する。

## 30) 腹腔鏡下外科手術 375 例の経験

川合 千尋 (消化器科・外科)  
川合クリニック  
川上 一岳・大谷 哲也 (日本歯科大学)  
早見 守仁・吉田 奎介 (新潟歯学部外科)

日本歯科大学新潟歯学部外科では1991年10月1日より腹腔鏡下外科手術を開始し、1996年9月30日までの5年間で375例に施行したのでその成績を報告する。

内訳は胆嚢摘出術(LC)279例、LC+総胆管切石術16例、鼠径ヘルニア修復術49例(1例LC併施)、虫垂切除術11例、副腎腫瘍摘出術2例、大腸部分切除術3例、癒着剝離術5例、LC+肝嚢胞開窓術3例、脾臓摘出術1例、その他6例であった。年別に全身麻酔下手術中に占める腹腔鏡下手術の割合をみると、1991年9.8%、1992年55.4%、1993年56.7%、1994年56.0%、1995年53.9%、1996年(9月まで)56.4%であった。総胆管切石術を含めたLCでの開腹移行症例は24例(8%)であった。その他、術後経過、合併症の頻度など検討し報告したい。

## 31) 後腹膜漿液性嚢胞の1手術例

金子 耕司・角田 和彦  
篠川 主・鰐淵 勉 (南部郷総合病院)  
佐藤 巖 (外科)

非常に稀とされている後腹膜漿液性嚢胞の1例を経験

したので報告する。

症例は70歳、女性。昭和61年3月25日左季肋部痛を主訴に来院。腹部超音波検査にて左側から背部に嚢胞状病変を指摘され左卵巣嚢腫を疑われた。外来通院で経過観察していたが平成6年6月3日増大傾向認められたため精査のため入院。後腹膜漿液性嚢腫疑われ、手術をすすめるも本人希望されず、8月2日超音波誘導下嚢腫穿刺吸引。平成7年6月26日、2回目の穿刺吸引を施行。無色透明な漿液性水溶液を吸引、細胞診の結果はclass Iであった。その後も痛みは持続し嚢腫も縮小認められないため手術を希望され、平成8年3月25日嚢腫摘出術施行。表面は平滑で被膜は薄く、内容は100ml無色漿液性で、断面は単房性嚢胞であった。術後7カ月現在再発の徴候はない。

32) ヘパリン不要の皮下埋め込み型中心静脈リ  
ザーバの使用経験

中村 茂樹・藤巻 宏夫  
島田 寛治 (県立加茂病院外科)

【対象と方法】おもに末期癌患者に対して、皮下埋め込み型中心静脈リザーバ(以下、リザーバ)を41例に設置した。用いたリザーバは初期の20例はSMIP(住友ベークライト)で、輸液終了後はヘパリンロックの必要があった。その後の21例には、Groshongカテーテルキットを用いた。このカテーテルの特徴は、輸液中は先端側面のスリットから輸液が血管内に入り、輸液終了後はこのスリットが自然閉鎖するため、生食水を満たしておくだけでよい。強い陰圧で引くとスリットが内翻し、採血路として用いることもできる。

【結果と考案】全41例中、合併症は5例12.5%(創血腫2例、膿瘍1例、低栄養による皮膚壊死1例、カテーテル熱1例)だったが、多くは初期のSMIP例である。Groshongカテーテルに特有と思われるトラブルや合併症はなかった。Groshongカテーテルからと末梢静脈からとの検血データに有意差はなく、採血と輸液が1回の穿刺で可能だった。

【まとめ】Groshongカテーテルはリザーバの管理を容易にする。